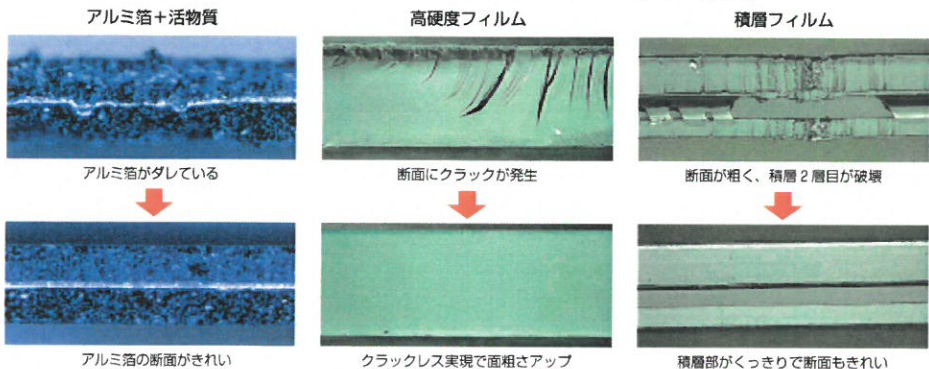
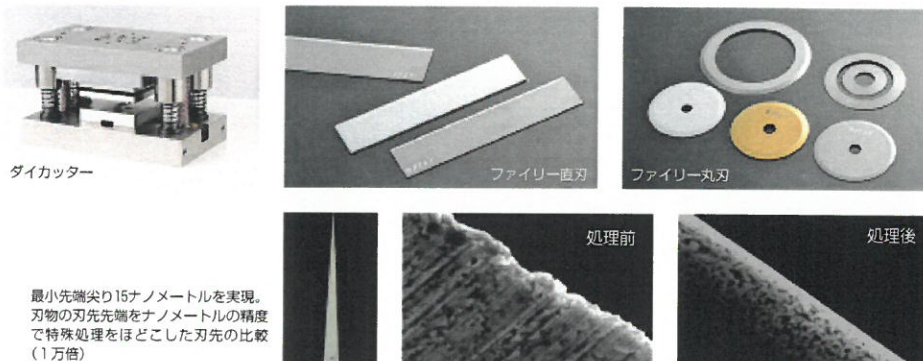


切断面比較（上が一般的な刃物、下が「ファイリー刃」での切断面）



機能性を持たせた完全オーダーメイドの製品例



最小先端尖り15ナノメートルを実現。刃物の刃先端をナノメートルの精度で特殊処理をほどこした刃先の比較（1万倍）

自体は昔から存在していましたが、「切る」という作業も道具の進化によって世の中が変わっていきという印象を受けます。

本木 ● 人類の発祥の地ではないかと言われているタンザニアの北のオルドヴァイ渓谷から石器が出土しました。この石器が250万年前に人類が道具として初めて発明したとされる刃物です。つまり、刃物の歴史とは人類史そのものなのです。

「切る」という作業はモノづくりの原点で、すべての業界にあります。この「切ること」を劇的に変えることができれば、はかり知れないビジネスチャンスがあるのではないかと胸が躍ります。

今回の新型コロナウイルス感染症で、たとえ当社で感染者が出たとしても供給し続ける対策をとるようにと、多くのお客様からお願いをされています。

廣田 ● 他社の製品に置き換えられませんし、医療では人の命に関わってくるところもありますから、それだけ責任も重いですね。

本木 ● はい。品質と供給責任は重くのしかかります。しかし、他社がやらないところにかないたい、我々中小企業は強くなれないから。

廣田 ● この数年で国内5拠点体制を整えられました。これにはどんな意図があるのでしょうか。

本木 ● 1つはBCP（事業継続計画）、つまり、自然災害やテロ攻撃などの緊急事態に遭遇した場合でも供給を止めない体制を作るとい、国の指針に基づく対策です。また、超硬合金は使い捨てではなく、研ぎ直して使えるメリットが

スライスしたりするのは、これまでの常識を覆すためのデモンストレーションです。これによってお客様に刃物の未知の可能性に気づいてもらいたいからです。

廣田 ● 被切断物の2次工程が不要であれば、かなりコストダウンできますね。御社の刃物は現在、どのようなところで使われているのですか。

本木 ● さまざまな分野で使われていますが、今のところ電子部品業界の比重が高くて、パネルなどが切られています。

最近の自動車は家電化していて、切る工程が増えてきました。また、車のボディも炭素繊維になるといことで、その需要も見込まれ、自動車業界が今後大きなシェアを占めていくだろうと思っています。

医療機器製造に参入

廣田 ● 2011年には医療分野にも参入されましたね。

本木 ● はい。実は医療機器に関して、日本は後進国なんです。そこで医学と工学を結び付けて医療機器の開発を推進しようという国の指針に基づき、2011年7月に九州大学に先端医療イノベーションセンターができました。我々もプロジェクトの一つに参加し、腹腔鏡手術で使うメスを作りました。

今は内視鏡の先端に取り付けるハサミを開発中です。内視鏡でポリプを摘出する時、高周波メスで焼き切りますが、そこには問題があります。そこでハサミで切れないかというのが30年間の課題だったそうです。

あるところからその開発を依頼され、ようやくほぼ完成に近づいています。来年には市場に出したいと思っています。

廣田 ● 一度にスパッと切れると、短時間で済むため、体への負担も少なく、回復も早いのではないかと。

本木 ● はい。このような手術器具のニーズがだんだん増えてきています。先端を2ナノメートルにできると、医学で大きく貢献できる分野があるといことで、これも現在開発中です。医療には未解決なフィールドが多く、たくさんニーズがあるとつくづく感じています。

当社は企業理念に「世界と地域に貢献する」、ミッションに「社会と人類に貢献する」を掲げています。我々の刃物が医療の分野でもお役に立てば、人類に貢献するというミッションの1つが叶えられるんじゃないかと考えています。

廣田 ● 大きな転機から12年、現在、刃物の売上は占める割合はどれくらいですか。

本木 ● 今では7、8割が刃物です。

実は今、「コロナショック」と言われる第二のビッグチャンスがきていると私は思っています。こんな時しか大きく変わる機会はありませんから、どう変わるべきか一生懸命考えています。まだ暗中模索のころもありますが、ビッグチャンスにするんだという思いで臨んでいます。

品質責任と供給責任

廣田 ● 一見単純に見える「切る」ということですが、奥深い世界なんです。切るという作業

あります。ですから、近くにはほしいというお客様の要望もありました。それで5拠点の営業所体制にしたんです。

廣田 ● 現在、従業員の方は何名で、男女の比率はどれくらいですか。

本木 ● 267人で、6・4で女性が多いですね。

廣田 ● 刃物の製造機械を操作されるのは主に女性ですか。

本木 ● はい。女性は手先が器用で辛抱強く、仕事丁寧なんです。当社の刃物は重くないし、小さいものが多いので、当社は女性に向いている職場なんです。ただ、刃物は全部で30工程くらいあり、最初から最後まで一貫してこなせるのは男性社員が多いのですが、その中の限られた工程だけを担当すると、女性はとても力を発揮してくれます。女性からもそのような希望があることが多く、我々もいろいろ試行錯誤して、今のかたちになりました。

廣田 ● 女性は御社の製造部門にとつての重要な戦力ということですが、手がかる年頃のお子様がいらっしゃったり環境はさまざまだと思うのです。働く場の提供に際してどういった工夫をされていますか。

本木 ● 女性の多くが主婦の方ですが、毎日、一生懸命働いてくれています。パートといえども責任のある仕事を任せていますので、当然、昇給もします。厚生労働省から「同一労働同一賃金」の見本だとお褒めの言葉をいただいています。

彼女たちもみんなモチベーションが高く、本当に責任感を持って仕事をしてくれています。



本木敏彦(もとぎ・としひこ) 代表取締役社長

1953年生まれ。柳川市出身。工業高校卒業後、三井三池製作所に入社し、13年間設計を担当。1985年に独立し、半導体金型部品の製作開始。1989年ファイネックを設立し、現在に至る。

会社概要

名称/株式会社ファイネック
住所/柳川市西浜武575番地1
http://www.f-finetec.co.jp/
創業/1985年6月
設立/1989年11月
事業内容/高機能切断装置、超精密切断金型、機能的刃物、医療用刃物
拠点/関東工場・営業所、関西営業所、中部営業所、南関東営業所、東京サテライト

沿革

- 1985年 半導体金型部品製作開始
1989年 株式会社ファイネック設立
2009年 ビジョン「世界一の産業用刃物メーカーへ!」を定め、新ブランド「ファイリー」を商標登録
2010年 切断の総合プロデュース企業としてお客様への技術サポート体制を確立
2012年 世界最高レベルの抜型製作に成功
2013年 医療機器製造業取得
2014年 第二種医療機器製造販売業取得
2015年 「がんばる中小企業小規模事業者300社」に選定
2015年 「切断革命」商標登録
2016年 テクニカルセンター開設
2018年 第7回ものづくり日本大賞・経済産業大臣賞7名受賞
2019年 関東工場(技術研究所)・関西営業所併設、中部営業所を新設
2020年 関西営業所、南関東営業所、東京サテライトを新設

柳川市の人口は1960年の8万6888人... 東京大学の先生に「切るといっう学問が世の中...」



ファイネック本社の外観(左)と工場内



モノづくりの世界はどちらかというと男性社会... 夢なき者に成功なし

夢なき者に成功なし

廣田●新製品を含む刃物の開発はどのように... 本木●社内にはファイリー技術研究所という開発...

ブレードバレー柳川

廣田●企業理念には地域貢献もあげられています... 本木●私には「ブレードバレー構想」という夢...

*トップ対談を終えて

廣田真弥

私には常々社員にこう言っています... 廣田●夢は大きな力です... 本日はありがとうございました。

「技術ではなく、切断品質を売っている」と強調... 「技術でなく、切断品質を売っている」と強調...